

八幡門前自治会がある地区の歴史小話（令和3年11月） 回覧

3. 葛飾八幡宮（その1 創建時の背景）

葛飾八幡宮は、今は市川市の施設が建って広い境内の面影は感じられなくなっていますが、立派な神社です。参道は京成電鉄が分断していますが、国道14号から神社



拝殿まで約280mあります。神社御所蔵の古地図には流鏝馬が行われていたことが記されています。流鏝馬用の馬場の長さは2町=約218mですので参道の横で行われたのでしょうか。

（左の鳥瞰図には京成電車が描かれていますから、大正4年（1915）以降の図…神社蔵）

御祭神は誉田別命（応神天皇）、息長帯姫命（神功皇后）、玉依姫命（初代神武天皇の母）であり、皇室の先祖神（皇祖神）として伊勢神宮に次いで信仰が篤く、また全国的に多い神社です。皇祖神を祭るお伊勢さんと八幡様には女神様が祭られており、女性天皇もありかと思えますが。

八幡の名は「幡」は神の依り代（神霊が寄りつくもの）の「旗」を意味し、「八」は多いことの象徴（日本のことを大八洲とも言う）との説もありますが確証はないです。奈良時代から平安時代初期には八幡神を応神天皇とする記述が登場します。

八幡様は宇佐八幡が東大寺大仏の建立に関与したように神仏習合（日本では仏・菩薩が仮に神になった）が一番早く進んだ神（八幡大菩薩）と言われております。

8世紀には弓削道鏡に天皇位を与えよという御神託を確認に和氣清麻呂が出向いた時に却下の御神託を付与しております。

歴史書（『日本の歴史四 揺れ動く貴族社会』川尻秋生著）には、貞観期（859～877）に朝鮮半島の新羅との関係が悪化し、これに伴い『日本書紀』の説話（神功皇后が武内宿禰らと朝鮮に出兵して新羅を討ち、百済・高句麗を帰服させた後に応神天皇を産み落とした）がクローズアップされ、神功皇后、応神天皇と同体の八幡神は王権の信仰を集めるようになり、ついに皇祖神としての地位を不動のものにしたと記載されています。武の神様、安産・子育ての神様のイメージは、この説話から生まれています。

清和天皇が貞観2年（860）に京都の石清水八幡宮（豊前国宇佐神宮から勧請）を創建され、葛飾八幡宮は宇多天皇の勅願により寛平年間（889～898）に石清水八幡宮より勧請し、下総国総鎮守八幡宮として御鎮座されたと伝えています。上総国の惣社の飯香岡八幡宮にも元慶3年（879）に朝廷により社殿が造営との伝承があります。

当宮は下総の国府（国府台）の近くですから、奈良時代の国分寺（国分4丁目辺り）に代わる総鎮守としての位置づけでしょう。（下総国の一ノ宮は香取神宮）